

伊藤昌哉氏（元福田内閣調査員）に聞く

# 大福提携と四十日抗争

―聞き手・山岸一平



自民党の分裂首班指名で衆議院本会議での決戦投票風景。大平正芳138票、福田赳夫121票で大平首相が再選される。（1979年11月6日）

## 大平内閣の「軍師」になった経緯

去 華 就 実

——伊藤さんは、大平内閣ができると一種の「軍師」というか、有力なブレーンとして支えたわけですが、そういう関係になつたいきさつはどういうことですか。

伊藤 池田総理が退陣し、死去してしまつたため、私は前尾繁三郎氏の意向もあつて宏池会事務局長になつた。当時、会長は前尾さんだつた。池田さんが「この人しかいない」と思つて後を託した人なので、いろいろ尽くしたんですが、この人は病人なんだね。ひどい糖尿病でね、デシジョン・メイキング（意志決定）ができないの。前尾さんと付き合っているうちに、だんだん、これじゃちよつと無理だと、前尾さんじゃ、天下は取れないと思うようになったの。そこでね、あと考えたら大平さんしかいないんだよ。それでね、大平をどうする、じゃ考えようかな、と迷つておつたんです。ちよつどその頃、五島昇さんから宏池会を辞めるのなら東急建設に来てくれぬかという話があり、考える期間を置こうと思つて辞めて行つたんです。そうしたら、荒川の（金光教の）教会に行つてうちに、荒川の先生が「あんた、大平さんをどう思うんだね。大平さんを総理にしたらどうですか」と向うから言うんだよ。「いや、僕はね、前尾さんも駄目だけでも大平さんも駄目だと思う。すぐ、この人は停滞しちゃうんだよ。同じ所を足踏みしちゃうんだよ。先へ進まない。本当のライバルは田中角栄氏だ。しかし、彼を切る力はないと思う」と答えた。ちよつど宏池会がごたごたして、大平さんが前尾さんの後を継いで三代目の宏池会会長になつた直後のことだけだね。

——そういう伊藤さんの考え方に対して荒川の先生は……。

伊藤　そうすると先生は「そんなことを、あんた言わずに大平さんを変えればいいじゃないですか」と言うから、私は「変えることができますか」と質問すると「できません。あんたがその気になれば、なります。大平さんを変えろということ、大平さんが池田さんになればいいんだ」と言われたね。大平が池田になればいい。そうすると私が池田さんに仕えたと同じように、大平さんに仕えれば大平内閣ができる。だから、「大平内閣をつくります」ということを、今日、神様にお願ひしてほしい。私、明日、ご本部に行くから、お届けしてきますからね」と言われちゃったんだ。それで僕は、神様にちやんと誓ったんだ、「大平さんを総理にいたします」と。私の心の中では、この人はなれるとは思えないけれども、また足踏みしちゃってね、どうしても踏み切りが弱いからね。それを変えるのは僕のみだけじゃ駄目だ。別の力（神様の力）がなければできない。それには僕が変らなければ大平は変らないんだ。池田さんでもできなかったことを、やることになる。それが池田さんに対する恩返しだと信じたんだ。だからね、ある意味で悲壮だった。無敵でしたね。誰も恐くはない。もちろん大平さんと僕との間には、葛藤がありましたよ。しかし、「俺をだまかしても神様はだまかせない」ということで、もう何もこわくはなかったね。あの時も、今でもそうですよ。

——それは大福提携をする前ですか。それで伊藤さんは大福提携を考えられた……。

### 大福提携に関する両サイドの思惑

伊藤　（大福提携を）する前です。何故、大福提携を考えたといったら、第一番目は石油ショック

実 ですよ、第二次オイルショック。これを解決するためには、財界の協力と大蔵省の力が要る。大蔵省の政策的な能力というものを一〇〇パーセント使うためには、大平さんは大福提携をしなければだめだと。これね、予算をつくるのを見て一番はつきり分かると思ったからね、オトウチャンのところへ行っただよ。大福提携してね、行ったら、面白くない顔をしているんだね。「いろいろ言うけれども最後になると、細かいことを福田は言って、まとまらないんだよ」と言って、面白くないから、おかしいなと思

ってね、すぐ俺、大蔵省に行っただよ。そして事務方の話をちよっと聞いたんだよ。そしたら「伊藤さんね、それはだめですよ。大蔵省の主計局は二つあって、主流は全部、何とかの何とかの何階に溜まりができておって、そこで福田さんと全部、連絡してるんだ。福田さんのOKが得られなければ、省議をまとめないんだ」と言う。オトウチャン（大平さん）がまとめようと思っても、（大蔵省側は）皆んな「それできません、できません」で蹴っ飛ばしてしまう。それで俺は怒ってね、福田のところへ電話をするんだよ。「あんた誰」と言うから、「プーチャンだ」と言ったら、「ああそうか、プーチャンか。なに」と言うから、「福田さん、あんたね、今まで予算を何回つくりましたか。何遍つくっても、一回でもあんた、天下を取ったことがありますか。大平さんが大蔵大臣になって、初めて予算をつくらうというのに、何故、大平さんの思ったとおりに予算をつくらせないのですか。僕はいろいろ話を聞きまして、どうもおかしいと思うから、ね。大平さんに予算をつくらせて下さい。それがなかつたら、大福提携はできません、したことになりますよ」と言った。「わかった。そうするから」、それで予算をね、全部、オトウチャンの言うとおりに後でまとめるの。これは大福提携の恐らく節目になる現象だったと僕は思う。それで大平さんも、初めて大福提携してもよろしいという気持ちになったと思う。

——一方、田中（角栄）サイドについては……。

伊藤 もう一つは、田中さんが本当は次に大平に政権を渡すつもりはないということ、はっきり知ったことです。それはね、田中無罪説の上に立った椎名構想という奴があるんだよ。椎名（悦三郎）さんが行司役をしながら、いつの間にか禪をつけて自分でも相撲を取るわけだよ。こんな馬鹿な話はあるかということだ。これは前から判っていたんだよ。角さんは椎名さんにまとめさせようということを考えて、そのことを（鈴木）善幸さんに吹き込むんだよ。善幸さんは、すっかり椎名構想に乗っかってちゃっているわけですよ。だから、田中さんが政権を辞めた後、政権を取るのには椎名さんなんだよ。椎名さんというのは一〇名くらいの椎名派の領袖だからね。この一〇名くらいの椎名派の外郭に全部、田中派六〇名ぐらいが取り巻くわけだよ。そして田中派にしちゃうんだよ、これを。七〇名の田中系派閥が椎名を擁して、次期政権をつくるわけだ。それに大平派が全部つけば、それは田中さんのための政権なんだね。大平さんの政権になったら、大平の線ができて続いてしまつて、政権がそのまま行っちゃうかも知れない。これを心配したのだから、何故かといつたら、田中さんは無罪になる自信があつたんだよ。無罪になつたら、すぐ政権を取ろうと思つていたんだ。そのためには自分の傀儡政権ができていなければならぬ、別なところへ政権が行っちゃうんだから。政権を取らなかつたら、自分が無罪工作をやつたつて、ナンセンスになるんだよ。だから、どうしてもこれは椎名さんに仕掛けないといけない。

——それに対して、大平さんはどうでしたか。

伊藤 僕はね、「やっぱりこれは椎名だと思つたんだ。思つたとおりだ」とこう言つたらね、ある

実日、そう言ったんだよ。これは情報じゃない、判断だと結論をなにも言わずに「やっぱり、僕が思っ  
たとおりだった」と。大平さんは「何が思ったとおりなんだ」と言う。「田中角栄さんは、あなたに政  
権を渡すつもりは全然ないよ。」「どうしてだ」「椎名さんが次の政権を取るんだ。椎名構想という奴が  
あるんだ。田中さんは、昼と夜とでは考えが違うんだからね」と言つて、僕ははじめて大平に角栄論  
をぶつつけたのだ。「角栄は昼と夜とでは違うのか」とか何とか言つて、初めて彼を考えた。そして、  
「よし、大福提携で行こう」というふうに関心したと、僕は思います。

ですから、これは大平内閣の時のことですが、(鈴木)善幸さんの処遇の仕方に非常にはつきり出て  
きた。善幸さんを幹事長にしなければいけないのだけど、福田さんが絶対反対するのよ。「あの人は、  
田中寄りだからね、大平政権の幹事長にするのはいやだ」と。政権ができて大平さんが「君は幹事長  
以外の官房長官でも大蔵大臣でも何でもよいから、君の好きなものを取れ」ということを言うんだけ  
れども、善幸さんは「嫌だ」と言う。それで斎藤邦吉氏を幹事長にするんだよ。斎藤氏は完全に田中  
さんの子分だから。椎名構想の信奉者だから。だから大平政権でないんだ、これ。そんなこと判り切  
っているんだよ、まあ、絵に画いたようにスーツとこう来ているからね。そのとおりになっているか  
ら、大平さんも考えたんだらう。

——大平政権は最初から苦難の連続でしたな。その中でも、昭和五四年(一九七九年)一〇月の総  
選挙で、自民党が公認候補だけでは過半数割れになってしまった後の、いわゆる四十日抗争。最終的  
には、自民党内の主流派と反主流派の話し合いが決裂し、国会の首班指名選挙で大平さんと福田さん  
の二人が出るという前代未聞の事態となつたわけですが……。

## 四十日抗争の両サイドの論理

伊藤 ああいう最悪の事態になったのは、やっぱり党分裂が実体ですが、辛うじて一本になったという成り行きですね。だんだん話し合っているうちに、福田さんも大平さんを信用できなくなるし、大平さんも福田さんを信用できなくなる。それで力で闘おうということになってしまった。あの時、僕はね、大平政権を捨てたらどうだろうかと、というふうには思ってたんだ。だから「オトウチャン、辞めたほうが……」と進言したんだ。これが大平さんに対する借りになってるんだ。辞めてどこに落とすかというところ、僕は社会党に落とすべきだと思ってたんだ。それはね、朝日新聞の論説が、大平政権は選挙で多数を取らなかつたのだから、大平さんの考え方というものを国民が支持しなかつたのだから、反対党に政権を渡すというのが民主主義の原則だと主張していたんだ。もっとも政権が社会党に行っても半年ももたないと思つたよ。

——「辞めた方がいい」と言われた……。

伊藤 あの当時、大平と三木（武夫）、福田の三人が会談すると、三木さんは「大平君、あんたが辞めさえすれば問題は解決するんだ」と言つて、矮小化して政局を安定させようとしていた。大平さんが「予算もつくらせないで俺を辞めさせるといふのは、俺に死ねといふことか」と怒つたといふのは、当たり前の話だ。そこで僕は「あんた死んでもいいからね、渡しちまえなさい。三木さんの主張が通つて辞めた結果、社会党に政権が回ってしまった。三木は社会党に政権を持って行かせるという誘導係をしたんだ。そういうことにさせてしまえ」という意味のことを言つたんだ。そうしたら「よ

就 実し判った、それで行く」ということになったが、三木がこれをブルって、結果として大平さんは死地を脱出する道を一つつくったんだよ。

華 そうしたら三木さんは「私は純粹の保守党政政治家なんだ。自民党で政権を取らなければ駄目だ。今の難局（の打開）は自民党でなければできないんだ」と断ったんだ。そういえば、一昨年（九八年）の金融国会の時に民主党の菅直人代表が「金融不安は政局にしない」と言ったが、あの時（四十日抗争）の三木さんと同じ形を取っているね。俺も不思議でしょうがないくらいに面白いよ。菅政権をつくったら半歳で潰れるということを知っていたんだよ。僕はその点、当然だ思うよ。あの時は、それで結局、力の対立で強い奴が勝つという方向に行つて、大平さんが辛うじて勝った。あそこるところ、うまくまとまった、ということになるわけですね。

—— 四十日抗争の時、大平 田中の関係は磐石だったんですかね。伊藤さんは田中さんについては、終始、批判的だったですね。

伊藤 ああ四十日間の抗争の時にね、田中さんが毎朝六時に大平邸に電話を掛けてくるんだよ。俺は六時には（大平邸に）行っているからね、ちょうど俺が着いた頃に電話が掛かってくる。その後で大平さんは「田中が今、こう言っているけれども、お前どう思うか」と聞くんだよ田中さんは大平が辞めはしないかと非常に心配しておった。辞めたら（田中にとつて）万歳（おしまい）だからね。そこで、大平さんは福田さんとの話し合いの方にだんだん固まっていく。僕は福田が裏切るつもりだということが判りましたからね。私は早く決戦体制を取るべきだと言ったんだけれども、大平さんは、非常に慎重だったね。それで僕は、鈴木善幸さんに（決戦を）やってくれと言って頼んだんだ。善幸

さんは、あの頃は主戦論の先鋒だったけれども、それを強力に推し進めるだけの力はなかったね。元来、大平さんや宏池会には、荒事ができないんですよ。大平さんも「自分のできないことを田中君はやってくれる」と認めてたんだよ。それはね、角さんがおったから勝ったんだと思いますよ。田中さんが背後にいないと、福田さんが威張りまくって、どうしようもなかった。だけど、俺がそう言ったら、大平さんは「俺が田中君の言うことを聞かなきゃいいんだろう」と言ったからね。ああそうか、大平さんが中心なんだなと思ったね。オトウチャンにそういう気持ちができるんだしたら、それ（大平 田中連携）は天下を取ってよろしいと。そうでなかったら、もう田中さんに使われればなしになってね、最悪の状態になってしまふからね。鈴木善幸内閣には、その危険があった。

——四十日抗争の半年後、今度は野党の提出した不信任案に、三木派、福田派が欠席し、中曽根派は出席したんだけど、これが通っちゃった。大平さんは衆議院を解散し、衆参同日選挙に入るわけですが、身内の中でのみにくい対立という、クリスチャンの大平さんが一番嫌いなことが、次々に起こってしまつた。これが大平さんを死に追いやつたと思えるのですが、あの事態は何故起きちゃつたんですかね。

伊藤 あれはね、福田派がね、負け戦の後追いですよ。そしてね、いかに国民が福田派を嫌つておつたかということの裏返し現象ですね。同日選挙で自民党は大勝でしたね。しかし、大平さんがああいう亡くなり方をしたから、大勝できたんですよ。そうでなければ、負けることもあつたでしょうな。あんな大勝の仕方は、もう滅多にないと思つていたんだよ。そしたら、中曽根内閣の時の衆参同日選挙でも大勝だった。俺もガツクリしてんだけど……。自民党の総裁選は、一人区で三人が競う小選挙区制です。候補者の中の二人が組んだら（大角連合）独立する福田に勝ち目は無い。最後の段階

実 で角栄に批判的な私の意見と角栄の意見が不思議に一致したのは、このためだ。私がどんなに角栄を  
就 批判しても、角栄の票は最後に大平に投票せざるを得ないので。これが大平勝利の秘密であり、田  
華 中角栄の身の上なのです。

去 ———大平さんの死が自民党を生き返らせたとも言えますね。ベネチア・サミットに出席すべきか否  
かを議論しているうちに亡くなってしまったのですが、伊藤さんが大平さんと最後にお会いになっ  
たのは、いつのことですか。

### オトウチャンとの不思議な別れ方

伊藤 死ぬ直前ですよ。僕は「大平さんの病気を治していただきたい」と、願を懸けていたんだ。  
ご本部（金光教）の金光に行ったわけだよ。それを大平総理は知っているんだよ。金光から帰って、  
俺が東京駅へ降りたら、「森田（一）秘書官を呼び出して、虎の門病院にすぐ来てくれ」という伝言  
なんだ。もう、だいぶオトウチャンは待っておったんだと思うんだな。気持ちの整理がしたかったん  
だろう。どうしたらよいのかで悩んでおったんだろうね。それで僕は行ったんだが、病院は黒山のよ  
うに人がたかっているんだよ。そこで一旦、引き返し、翌朝六時に出かけたんだ。新聞記者と医者  
と看護婦に監視されていて、会えないんだよね。そうしたら森田君が「何号室へ来て下さい。私が連  
れて大平の部屋に入りますから」と案内してくれたんだよ。「オトウチャン元気ですか。どうしてこ  
んなことになったの」と言ったら、「実は新宿で安井謙候補の応援演説をやっていたら、苦しくてし

ようがなくて冷汗ばかり出るんだよ。それでちょっと休ませてもらって、それからまた横浜で演説を続けたんだ。それでも、あんまり苦しいので、家に帰ったら、女房が『もうこんなことをしてたら、あんた死んでしまう。すぐ入院しましょう』と言つんで入院することになったんだ』と言つんです。

——ベネチア・サミットの話も出たのですか。

伊藤 私「今、あなたの置かれている立場がどういふものであるか、ということとは判つてますね」と聞いたら「判つている」と言うんだ。そこで「それじゃね、あなたがベネチア・サミットに出掛けるというのが嬉しくて嬉しくてしょうがない。小学校の生徒が遠足に行くように楽しいという気持ちで、どうしようもないというのだったら行きなさいよ。誰が何と言つても行けばいいんだ。死んだつていいじゃないですか。政治家は使命に死ぬんだ、あんた行つて来なさいよ。そして仕事をして帰つていらつしやいよ」と言つたんだ。そして「よし判つた、行こう」という気持ちになつたのじゃないのかな。「もう、あんたが国のために死んでも、死んで倒れたほうが、国のためになるんだということが国民に判れば、それでいいんですよ。あなたが政治家になつた最大の意味は、そこにあるのではないですか」という話をして、別れ際に「それじゃ、総理、元氣で行つてらつしやい」と言つたら、「伊藤さん、あなたも元氣でね」と言うんだよ。おかしいな、俺に何で元氣でねなんて言うのかな、と思ひながら部屋を出たんだ。それが永の別れになつちやつたんだよ。

——ご本人はベネチア・サミットに行く決心をしていた、ということですね。

伊藤 後で奥さんに話を聞いたんだが、本人は行くべきか行かざるべきかを、もう終日、それはつまり考えておつたらしいね。それが最後に行くつもりになつてね、佐藤嘉恭秘書官に空港から会場ま

実 でのくらいかかるのか、距離を調べてこいと、いろいろ細かい指示をしているんだ。頭はもう行くというほうへ行っちゃって、誰が言っても受け付けなかったそうさ。だから心は決心しておったんじゃないですか。俺は、それで死んでもいいんだ、という気持ちになっておったと思う。何か、どこかに引つかかかって、邪心があったら、こういうものはパーだからね。本当に私は国のためにつくすんだ、私が生まれてきたのはこのためだったんだ、という気持ちだけになっていたんだと思うよ。俺がオトウチャンと話したのは一時間近かったと思うんだが、亡くなったのが、その翌日だったからね。それは非常に不思議な別れ方をしたと思いますね。

——最後に、大平内閣というのは一年七月、政争に明け暮れしてなんら大きな実績をあげていないという評価と、もう一つは、二一世紀をにらんで、いろんな提言を出したり座標軸をつくり、それが後の内閣によって受け継がれたという評価があるんですがね。伊藤さんは、どう思われますか。

### 大平内閣への二つの評価について

伊藤 やっぱり大平さんは、課題というよりもむしろ目標を残したんだろうな。日本の近代政治において占領政治から独立して行く中で、目標を明確にしたというのは、大平内閣の時からじゃないのかな。九つの政策研究会などの問題意識なども二一世紀の日本を構想していたし。そうじゃなかったら、オトウチャンの存在価値は何にもなかったと思う。あの石油ショックを止めたというだけで終わつただろうね。

(平成十一年一月四日、伊藤昌哉氏宅で取材)